

文字の使用から見た『戦国縦横家書』

王 曹 傑

1. はじめに

『戦国縦横家書』は、1973年に湖南省長沙市にある馬王堆漢墓の三號墓から出土した帛書群のうちの一つであり、主に戦国時代における蘇秦をはじめとする縦横家たちの遊説活動を記した書物である¹⁾。本書は24枚の断片で出土し、縦23cm×横192cmの細長い絹帛に、約1.1萬餘字が325行にわたり、一切改行されず書寫されている。書體は古隸であり、書者は三人いると考えられている。本書に標題はなく（整理者によって最初は『帛書戦国策』、すぐあとに『戦国縦横家書』と命名された）、黒丸で區分を示し、全體が27の部分（章）に分かれている。27章の中、11章は現行本『戦国策』『史記』などと對照できる内容であり、ほかの16章は初めて發見された貴重な佚文である。書寫年代について、本書は全編にわたって前漢高祖劉邦の諱を避けていて恵帝劉盈の諱を避けていないことから、高祖年間（BC202～BC195）に書かれたものだと推定されている²⁾。

ところが、本書の性格にかかわる重要な問題の一つとして、『戦国縦横家書』のもととなる底本が同一なものではなく、つまり27章の文章は幾つかのグループに分けることができ、それぞれは異なる原資料から編集されてきたものだと考えられているが、グループ分けの分析結果は研究者によって必ずしも一致していない。本稿は文字の使用を中心としてこの問題について再檢證し、『戦国縦横家書』の編纂の實態を明らかにしたい。

2. 先行研究

『戦国縦横家書』の構成または各章の分類について、資料の發表當時から主に二種類の論説がある。まずは各説の論據をまとめる。

2.1 三分説

初めてこの問題を取り上げたのは楊寛（1975）であり、本書全27章は三つのグループに分類されている。この三分説は今まで一般的に主流説とされ、整理者の解題から日本の譯注まで廣く用いられている。

楊氏の論考は頗る簡略であるが、以下のように分析することができる。

（1）形式から見て、第十五章～第十九章のみ、各章の後ろに文字数の記載があり、更に第十九章の最後に5章の總字数をも記してあるため、明らかにこの5章は完結している獨立なグループである³⁾。よって、本書全體がこのグループに中斷され、三つの部分に分かれる。

（2）内容と體裁から見て、第一章～第十四章の第一部分是蘇秦をめぐる相關關係の強い資料であり、しかも各章いずれも「簡單な説明文+書簡（ないしは書簡と思われるもの）の本文」（大西ら2015:10）という形をとっていることから、亂雑な第二十章～第二十七章の第三部分と異なるグループだと考えられる。

（3）文字の使用から見て、第二十章～第二十七章の第三部分において、{趙}に「勺」を使わないこと⁴⁾、{韓}に「乾」を使わないこと、{張儀}が「張弔」となっていること、といった三つの特徴から、この第三部分と第一章～第十四章の第一部分を區別することができる。

2.2 四分説または新三分説

鄭良樹（1982）が楊氏の三分説を踏まえた上で、詳細な論考を加え、特に複雑な第三部分を更に細かく分類し、四分説または楊氏と違った三分説を唱えている。その論考は以下のようにまとめることができる。

（1）内容から見て、各章の主要登場人物などを考察し、その關聯性を觀察することによって、第三部分を5つの「單元」に分けることができ、全體は計7つのグループに分類される。

①第一章～第十四章、②第十五章～第十九章：（略）。

③第二十章と第二十一章：登場人物はいないが、同じ蘇秦の言論である。

④第二十二章と第二十四章：言及している人物は全く同じで、密接な關係がある。

⑤第二十三章と第二十七章：同じ人物はいないが、同じく楚人と楚事を述べ

ている。

⑥第二十五章、⑦第二十六章：他と繋がらない独立した章である。

(2) 文字の使用から見て、用語として國の名稱を「魏」と呼ぶかそれとも「梁」と呼ぶか、それから、「梁」に「梁」を使うかどうか、「韓」に「乾」を使うかどうか、「趙」に「勺」を使うかどうか、「謂」に「胃」を使うかどうか、「攻」に「功」を使うかどうか、といった特徴の一致性を確認する。そうすると、楊氏三分説の第三部分は第二十章～第二十四章（單元③と單元④と、單元⑤に属する第二十三章）、第二十五章～第二十六章（單元⑥と單元⑦）、第二十七章（單元⑤に所屬）、というように3つに分類することができ、第一部分と第二部分と併せて全體は5つのグループに分けられる。

(3) 上記二つの分析を統合すると、第二十七章は内容から見て關聯性のある第二十三章を経由し、第二十章～第二十四章のグループと合併しても、文字使用の面では矛盾が生じない。結果、本書全體は4つのグループに分類されることになる。これが四分説である。

(4) 更に、上記(2)の分析を徹底し、全體を中斷している第二部分（第十五章～第十九章）という壁を超えると、第二十五章～第二十六章と第一部分（第一章～第十四章）は同じグループと認めることも可能である。つまり、本書は第一章～第十四章と第二十五章～第二十六章、第十五章～第十九章、第二十章～第二十四章と第二十七章、というように3つのグループに分類される。これは鄭氏が論考の最後に提唱している新たな三分説である。

2.3 まとめ

上記各説の結論をまとめると、表1のようになる。各グループをアルファベットで表し、鄭氏が内容によって細分し得た「單元」も備考として示しておく。

表1

章	一～十四	十五～十九	二十～二四	二五～二六	二七
楊 寛 (1975)	A	B	C		
鄭良樹 (1982)	A	B	C	D或A	C
(備考: 鄭氏の「單元」)	①	②	③④⑤	⑥⑦	⑤

このように、第一章～第十四章、第十五章～第十九章、この二つの部分について内容や體裁における同一性が強く、學說による相違は殆どないが、他の部分については、文字の使用に對する分析が基本となっている。

しかし、楊氏が分析に用いた語は實際に2個しかなく、鄭氏が指摘したとおり、〔張儀〕の「𦍋」は第二十二章と第二十四章にしか出現していないため、統計する意味がない⁵⁾。一方、鄭氏の統計方法は理論的に問題はないが、その統計表を具體的に見てみると、複數の誤りが見受けられる⁶⁾。例えば、本書には實際に〔梁〕を表す時に一律「梁」となり、「𦍋」は出現していないはずだが、鄭氏は統計で數えて分析に使用していた⁷⁾。また、第三、第四、第七、第八章に存在する「謂」は鄭氏の統計表には空欄となっている。こういった統計の脱落や數字の誤差が多々あり、嚴密な調査とはいひ難く、比較對象の數としてもまだ十分とは言えない統計だと考えられる。

なお、異體字の使用について、釋文ではほぼ統一されているため、今まで検討されたことがないようである⁸⁾。それに、書者の違いによって、文字の使用を分析し得た結果に何かの影響があるかという視點からも論じられていない。

3. 文字の使用から見た底本來源の分別

先行研究を踏まえて、本稿ではまず前提として、『戰國縱橫家書』において各章は底本の來源の違いによって分類することができること、つまり、同じ原資料から編集されてきたものがその文字の使用では同じ傾向を示しているはずであると假定する。それから、鄭良樹(1982)が用いた分析方法に基づき、新たに調査を行い、統計表を作成する。

3.1 文字使用の統計

今回の統計對象について、まずは〔梁〕を除いた鄭氏の5例(用語の違い(同事異語)が1例と、同じ語に對して複數の字種を用いて表記する(同語異字)のが4例)を再檢證として取り入れる。更に、出現回數が多く、且つ各章にわたって廣く分布している同語異字の5例を今回の調査に加える。それから、同じ基準をもって、同じ字種に對して複數の異構異體字⁹⁾を用いて表記する(同字異形)4例を新たに選出して調査する。つまり、

同事異語… 1 例… 鄭氏調 1 例（番號：0）

同語異字… 9 例… 鄭氏調 4 例（番號：1～4）+ 新調査 5 例（番號：5～9）

同字異形… 4 例… 新調査 4 例（番號：10～13）

といった合計14例が今回の調査の対象となる。この14例のほかに、異表記はないか、または出現範囲や回数に限界などの理由により、統計に値する例は恐らくこれ以上ないと言ってもよいだろうと考えられる。

統計の結果は、表2のようである（紙面の都合上、本文の最後に掲載）。

3.2 文字使用の分析（一）——保守的な五分説

表2の統計結果から見ると、文字の使用において、各グループの中では確かに一定の一致性が見受けられる。この一致性は以下表3のような分布表によって示することができる。また、参考として、鄭氏の四分説または新三分説を併記しておく。

表3¹⁰⁾

鄭良樹（1982）		A	B	C	D或A	C
番號	語 異字／形	一～十四	十五～十九	二十～二四	二五～二六	二七
0.	{梁}：{魏}	+	±	—	+	—
12.	{楚} 楚：𡗗	+	±	—	+	—
6.	{禍} 禍：過	±	+	—	+	
3.	{謂} 謂：胃	±	—	—	+	
10.	{其} 其：元	±	—	—	+	—
13.	{與} 与：與 𡗗	±	與 𡗗	𡗗	與	與
7.	{氏} 氏：是	+	±	—		+
9.	{雖} 雖：唯	+	+	—		+
8.	{是} 氏：是	—	±	—	—	
1.	{趙國} 勺：趙	±	—	—	—	—
2.	{韓國} 乾：韓	±	—			
2.	{韓姓} 乾：韓	±	—			
11.	{無} 無：无	±	—		—	
5.	{爭} 靜靜：爭	+	—	—		
4.	{攻} 功：攻	+	—	—	—	

（※凡例：+…左表記、—…右表記、±…両方あり且つ比率相當、…例外一つ、”…例外二つ、空欄…出現なし）

(1) CとDについて

表3において、初めからの6例から、第二十章～第二十四章と第二十五章～第二十六章とは明らかに別グループであることが再確認された。つまり、第二十章～第二十四章では、第二十五章～第二十六章と比べて、以下のような用字傾向がある。

(イ) 同じ國に對して、{梁} という語を使い、{魏} を使わない。

(ロ) 同じ言葉に對して、{禍} {謂} を本字の「禍」「謂」そのまま書き、通假字の「過」「胃」を使わない。

(ハ) 同じ字種に對して、{楚} {其} をそのまま書き、異體字の「𪛗」「𪛖」を使わない。逆に、{與} を異體字の「𪛗」と書き、「與」となっていない。

このように、鄭氏が調査した同事異語(イ)や同語異字(ロ)だけではなく、異體字(ハ)も同様に、グループによってはっきり使い分けられていることが明らかになった。これにより、『戰國縱横家書』において、文字の使用状況に基づく底本の分類が可能である、という前提の成立を確認できた。

(2) Dについて

鄭氏の新三分説では、文字使用の一致性によって、四分説の(D) 第二十五章～第二十六章を(A) の第一章～第十四章と同じグループとして認めようとしている(上記2.2(4))が、(A) の14章にわたって、54例もの{攻} が全て「功」となっているのに對して、(D) の第二十五章～第二十六章では17例の{攻} が全て「攻」となるため、鄭氏が{攻} におけるの矛盾を無視していると考えられる¹¹⁾。従って、本稿では、鄭氏のこの合併を認めず、(D) と(A) は底本が異なる別のグループだと考える。

(3) Cについて

また、鄭氏の四分説では、第二十七章を第二十章～第二十四章に合併させる時に、矛盾が生じないとのことであったが、今回新たに調査した{氏} {雖} {與} の例により、矛盾を発見した。第二十章～第二十四章において、4例の{雖} が全て「唯」と書き、11例の{氏} が全て「是」と書き、5例の{與} が全て「𪛗」と書くのに對して、第二十七章ではそれぞれ「雖」「氏」「與」となる。そうすると、上記(2.2(3))の分析が成立しなくなる可能性が出てきた。即ち、第二十七章を第二十章～第二十四章と區別したほうが相應しいでは

ないかと考えられる。

しかし、第二十七章は11行だけの短い文章であるし、「雖」「與」が1例ずつで、「氏」も2例しか出現しないため、例外と見ることもできる。

(4) 私説：保守的な五分説

以上の分析をまとめると、鄭氏の論説に對して、新三分説における(D)と(A)の合併を取り止め、四分説に戻し、更に、慎重な態度で見れば、鄭氏が(C)にまとめた第二十七章を、第二十章～第二十四章と分けたほうがより厳密であろうと考えられる。つまり、本稿では、文字使用の統計に基づき、本書全體を第一章～第十四章、第十五章～第十九章、第二十章～第二十四章、第二十五章～第二十六章、第二十七章、という5つのグループに分ける「保守的な五分説」を主張する。

3.3 文字使用の分析(二)——第一部分の再検討

ここでは、内容や體裁においてある程度の同一性を示していて、従来一つのグループと考えられてきた(A)第一章～第十四章について再検討したい。表3で示しているように、このグループにおける文字の使用は、「±」となっているものが多く、明白な傾向のある第二十章以後とは明らかに性格が違うことが見て分かる。ところが、表2の統計をもとに、文字の使用傾向を更に分析していくと、この(A)の14章を細分する可能性が出てくる。

以下に示す表4のように、(A)グループの文字使用の分布を考察する。参考

表4

鄭良樹 (1982)		A				C	D或A	C
保守的な五分説		A				C	D	E
番號. 語	異字／形	一～十四				二十～二四	二五～二六	二七
		一～四	五	六～七	八～十四			
13. {與}	與矣：与	與		与'		矣	與	與
11. {無}	無：无	+			-		-	
1. {趙 _國 }	趙：勺	±		-		+	+',	+
3. {謂}	謂：胃	±	+			-	+	
10. {其}	其：元	+	-',		-"	-	+	-"
2. {韓 _國 }	韓：乾	+			-	+		

(※凡例：+…左表記、-…右表記、±…両方あり且つ比率相當、'…例外一つ、"…例外二つ、空欄…出現なし)

として、鄭氏の論説と「保守的な五分説」にまとめた私説を併記する。ただし、細分する餘地のない(B)第十五章～第十九章は省略する¹²⁾。

表4最初の3例を見てみると、第五章以前では「與」「無」が殆ど「與」「無」と書かれるのに對して、第六章から第十四章まででは殆ど「与」「无」となり、また、後者においては「趙國」が「勺」のみで書かれることが確認でき、一つ境界線が存在するように見える。

しかし、「謂」「其」から見ると、單純に「謂」と書くのも「元」と書くのも第五章から始まることが分かる。第一章～第四章における「謂」を表す「胃」は、第一章の2例と第三章の1例となり、例外的に散在するものと見る事ができて、第五章には「其」の3例が全て「元」となるのを例外と見ることは難しい。

従って、第四章または第五章を境に、(A)グループの前半と後半は、文字使用の傾向ではある程度の差異を表しているが、前述のようなはっきりした區別ではない。

更に、「韓國」から見ると、前7章と後7章との違いも見受けられる。つまり、前7章では「韓」となるのに對して、後7章では「乾」となる。これは何を意味しているのかについて興味深い、一例しかないので、文字使用の面で議論するには難しいかと考えられる¹³⁾。

要するに、本稿では、文字使用の分析により、從來の第一部分、(A)グループを細分する可能性に對して、問題提起するに止まらざるを得ない。

このような揺れている用字傾向は何を意味しているのか。一つの解釋として、このグループの底本は、來源の異なるいくつかの原資料から、蘇秦を中心としたものを集めてきてできたものであり、ある程度初期的な編集を経たものの、この帛書に書寫される時には編集がまだ完結していないと考えられる。

4. 書者の違いと文字の使用

本書の書寫は、三人が交代して完成したこと、既に陳松長(2007)が書風の違いから明示している。また、郭永秉(2012)によると、第二十一章の後半に當たる第235行における第9字(圖Aを参照、圖上第二行の下から三字目の「矣」)までは一人目(本稿では甲という)、第二十七章(圖Bを参照、缺損部が章の分け目

に当たる）は三人目（本稿では丙という）、間は二人目（本稿では乙という）ということが分かる。

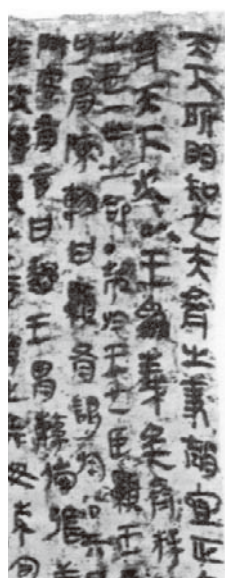
ここで、今まで底本の分類についての各説と書者の違いとを表5にまとめる。

図B（第309～320行局部）



←丙 乙→

図A（第234～238行局部）



←乙 甲→

表5

章	一～十四	十五～十九	二十～二十一	二一～二四	二五～二六	二七
楊（1975）	A	B	C			
鄭（1982）	A	B	C		D或A	C
私説	A（A1,A2,...?）	B	C		D	E
書者	甲			乙		丙

（1）甲と乙について

上記（3.2）の表3に示されているように、（C）第二十章～第二十四章において、文字使用の分布は全部「－」となり、その範囲である第209行～第271行

にわたって、第235行で甲と乙が交代しても、高度な一致性を示している。これによって、書者は絹帛に書寫する時に、底本にある字形を構造まで忠實に反映していることが分かる¹⁴⁾。その理由の一つとして、前漢初期では、絹帛は貴重なものであり、竹簡と違って、より丁重に使われていたからだと考えられる。

(2) 丙について

陳松長(2007)の書風に對する分析によると、最後に第二十七章を擔當する丙は三人の書者の中では一番レベルが低いという。そうすると、前述「保守的な五分説」で慎重な態度で認めた、第二十七章における「氏」「雖」「與」の異質な表記について(上記3.2(3)を参照)、それは底本の違いを反映するものではなく、書者丙のいい加減な書寫による偶発的な現象かもしれない、というふうに解釋することも可能性として出てくる。とはいえ、丙の擔當部分は短くて例も少ないため、判斷しがたいところである。

(3) 甲について

書者甲は擔當する部分が一番長く、字も一番丁寧である。陳松長(2007)の分析によると、甲のレベルが一番高いが、途中から間違いが多くなっていて、塗りつぶして書き直すところが多くなる。そうすると、上記(3.3)で(A)グループの細分に對する問題提起について、そこで見られた文字使用の揺れは、書者の作業状態または心境の變化によるもので、底本に對する忠實さの異變を反映している、という解釋も可能になる。

表4を見ると、確かに(A)グループの範圍では、「與」「無」「趙」「其」「韓」がそれぞれ「与」「无」「勺」「元」「乾」に變化していき、つまり「謂」以外全ての例がより簡単な表記になっていくことが分かる。大西ら(2015:38)はこの第一部分における「趙」の變化を見て、「本テキストが原資料の表記を忠實に繼承しているのではなく、漢代の通常の表記に次第に書き換えられる途上にあった」と指摘している。

しかし、擔當の後半部分、第十五章に入り、更に第二十章に入ると、間違えて書き直したりするところが増えていくが、上記(A)グループで見受けられたような表記の簡單化が見当たらない。従って、従来の第一部分、(A)グループにおける文字使用の揺れは、今回の書者甲による可能性はないと言い切れな

いけれど、それより以前、初期的な編集の段階で、恐らく竹簡の形において別の書者（複数人また複数回の書寫）によって生じた可能性が高いと考えられる。

5. おわりに

本稿は、先行研究（表1）を参考した上で、『戦国縦横家書』における文字の使用状況に對して、異構異體字を含めた新たな例を加えて再調査を行い、統計表（表2）と用字傾向を示す分布表（表3と表4）を作成した。文字使用の分析に基づき、以下の論點を擧げてきた（上記表5を参照）。

（1）保守的な五分説。本書は來源の異なる複数の底本を持ち、内容と體裁の同一性を基にして、文字使用の傾向により、嚴密に分類すると5つのグループに分けることができる。その中、最後の短い第二十七章は、書者丙の不注意による偶發的な異變があるかもしれないが、文字使用の實態に従い、獨立したグループと見做している。


（2）第一部分の細分に對する問題提起。第一章～第十四章の長い部分において、第五章あたりを境にして、前後の文字使用が違ふ傾向を示しており、表記の簡單化も見受けられる。これは、書者甲の状況の變化による可能性があるが、この部分の底本自體が單純ではない可能性が高い。來源の異なる複数の原資料を集めてきて、竹簡などの形で初期的な編集を経ていながらまだ完成していないため、文字使用の揺れが生じたと考えられる。

（3）帛書書者の忠實さ。書者は各底本の文字を異體字の構造まで忠實に帛書に書き寫していると考えられ、書者の違いがあっても、それぞれ底本における文字使用の特徴を反映している。


最後に、『戦国縦横家書』の編纂について、次のようにまとめることができる。本書は異なる複数の原典から収集してきた史料の輯録であり、その中、底本（A）は幾つかの史料から初期的な編集を経た史料群あるいは史書の草稿、底本（B）は編纂過程が完結している史書、他の（C）（D）（E）の部分は別に異なる原始的な史料から補足として付け加えられてきた内容、というように、三種類の性格を持っている5つの底本により、絹帛に丁寧に書寫してできたものである。

表 2¹⁵⁾

注)

- 1) 本書の出土状況について、湖南省博物館ら（2004）の調査報告が詳しい。全體の圖版と釋文は、馬王堆漢墓帛書整理小組（本稿では「整理者」と略稱）の『馬王堆漢墓帛書〔叁〕』（1978/1983）に收録されており、廣く參照されてきたが、近年では郭永秉（2012）などの再整理を経て、裘錫圭主編『長沙馬王堆漢墓簡帛集成』（2014）に最新の整理圖版と釋文注釋が公開された。なお、日本には、佐藤監修・工藤ら譯注（1993）や大西ら（2015）の譯注がある。
- 2) 「邦」字は全文に一例も出現せず、例えば官職名である「相邦」が「侯不使人胃（謂）燕相國」（第203行）などのように「國」で表し、同時に出土した『春秋事語』において「邦」が10例もあることと明白な對比を見せる。一方、「盈」の字は「句（苟）得時見、盈願矣」（第48行）など、3例が確認できる。
- 3) 具體的に言えば、第十五章「…●五百七十●」（第147行）、第十六章「…●八百五十八●」（第170行）、第十七章「…●五百六十三●」（第189行）、第十八章「…●五百六十九●」（第201行）、第十九章「…●三百●大凡二千八百七十●」（第209行）となる。
- 4) 本稿では、{ } で語を表し、「 」で字を示す。以下同様。
- 5) 本稿の統計によると、「張義（儀）」は第二十二章に7例、第二十四章に2例、計9例がある。しかし、「巍（魏）王胃（謂）韓備（備）、張義（儀）」（第238行）など、これら「義」の箇所は整理者（1983）が「義」と釋文し、{義}を表す時に使われる本字の「義」（「天下必以王爲義矣」（第235行）など）と、{議}を表す時に通假として使われる「義」（「有（又）慎毋非令羣臣眾義（議）功（攻）齊」（第66行）など）と混同している。ほかに、本書では「儀」もなければ、名前以外の{儀}もない。なお、「義」が{義}を表す場合もある（「然則齊義（義）、王以天下就之」（第235行、第二十三章）、「義」と「義」の字形を區別する裘錫圭主編（2014）の最新の釋文であっても、これを整理者（1983）そのまま「義」としている）。
- 6) 鄭良樹（1982：227）の統計表は紙幅の都合で省略する。
- 7) 鄭氏が統計表で唯一数えた{梁}を表す「梁」の例は第七章にあり、「今梁（梁）、勺（趙）、韓□□□□□□」（第62行、□は缺字を示す）の箇所である。恐らく、鄭氏は整理者が最初に發表した釋文（1975）にそのまま「梁」となっているのを參照したからだと考えられる。この例は圖版では「」となり、明らかに「梁（梁）」と釋文すべきものである。整理者（1976、1983）の釋文には既に直している。
- 8) 裘錫圭主編『長沙馬王堆漢墓簡帛集成』（2014）に公開された最新の釋文は、原文の字形をできるだけ忠實に隸定（楷書化）する努力をなされて、異體字の區別がある程度反映している。
- 9) 本稿では、王寧（2002：80-86）が提唱している異構字と異寫字の區別を受け、同一字種に収まる（「構件」（構成要素）の變更または増減により）構造の異なる字形を異構異體字といい、筆畫の個人差による異なる字形を異寫異體字という。本書の

整理者（1983）は、ほぼ全ての異體字を同じ字形に統一して釋文を作成していた。

- 10) 表2にある「趙_姓」と「興」を表す「舉」「興」「治」「餘」は、一二例しか出現していないため、この表3では省略する。なお、各グループの一致性を分かりやすく示すために、なるべく分布傾向が一致する例を一緒に並べているので、表2における番號の順と異なる。
- 11) 鄭氏の統計表（1982：227）では、數字の誤差があるが、「攻」を表す「攻」が第二十五章に1例、第二十六章に13例、計14例を確認できる。なお、本書では、「功」を表す「攻」はなく、「功」は全て「功」となる（「則前功有必棄矣」（第143行）など19例）。ほかに、「工」を表す「攻」は「非計慮之攻（工）也」（第140行）に1例がある。
- 12) (B) グループについて、表3で見ると、文字使用の一致性を示している一方、「±」になっている例もいくつかある。しかし、これらの例は、0番の「梁」と「魏」がほぼ第十五章から第十七章までの各章に分布し、ほぼ半分ずつ出現して完全に混用されているように見えるのを除けば、「楚」が3例、「興」が3例、「氏」を表す「是」が2例、「是」を表す「氏」が4例、という少数例が各章に散在していると見做すことができる（表2を参照）。いずれにせよ、前述した體裁などの理由も含めて、(B)の5章は(A)とは違って、更なる細分ができない性格を有しているに違いないだろう。
- 13) 鄭良樹（1982：200）が登場人物の分析から、この14章の相關性を認めつつ、前7章と後7章の中心人物が違うと指摘している。また、佐藤ら（1993：19）が各章の書信・談話の發信者と受信者との關係を圖式で示しており、蘇秦が全部かかわっているにもかかわらず、同じように前7章と後7章の違いが見受けられる。
- 14) 勿論、書者の違いは、文字において筆畫の區別が見受けられ、つまり異寫異體字で反映しているが、底本の文字の構造を壊すことはないと思っていだろう。
- 15) 點綫は本稿が主張する「保守的な五分説」を示す。第十二章に屬すべき二箇所は錯簡により、一つが同章の他所に、一つが第十一章にあったが、復元後の位置で統計する。
- 16) 「魏」は、例えば「謂巍（魏）王曰」（第147行）が圖版では「」となるように、本書55例の「魏」は全て「巍」となっているが、整理者（1983）が全部直接「魏」と釋文している。また、第十七章に出現した「公孫軼之欺巍（魏）印也」（第184行）の1例は、國名ではなく名字である「巍」なため、この表では計算外とする。
- 17) 「謂」では、第一章に字形の誤りと見られる「冒<胃（謂）>趙而欲說丹與得」（第2行）の一例を「胃」と計算する（「冒」と釋文し、さからうと讀む説もある）。

参考文献：

<中文>

陳松長（2007）「馬王堆漢墓帛書抄本特徵」。『湖南大學學報（社會科學版）』5：20-29。

- 郭永秉（2012）「馬王堆帛書『戰國縱橫家書』整理瑣記（三題）」、『文史』2：21-29。
- 湖南省博物館、湖南省文物考古研究所（2004）『長沙馬王堆二、三號漢墓·第一卷：田野考古發掘報告』。北京：文物出版社。
- 馬王堆漢墓帛書整理小組（1975）「馬王堆漢墓出土帛書『戰國策』釋文」、『文物』4：14-26。
- （1976）『馬王堆漢墓帛書·戰國縱橫家書』。北京：文物出版社。
- （1978/1983）『馬王堆漢墓帛書 [叁]』（綫裝本／精裝本）。北京：文物出版社。
- 裘錫圭主編（2014）『長沙馬王堆漢墓簡帛集成』。北京：中華書局。
- 王 寧（2002）『漢字構形學講座』。上海：上海教育出版社。
- 楊 寬（1975/1976/1981）「馬王堆帛書『戰國縱橫家書』的史料價值」、『文物』1975年第2期：26-34。又、馬王堆漢墓帛書整理小組（1976）附錄收錄。又、湖南省博物館編『馬王堆漢墓研究』（1981）：133-143、長沙：湖南人民出版社。
- 鄭良樹（1982）「論帛書本『戰國策』的分批及命名」、『竹簡帛書論文集』：195-227、北京：中華書局。

<日文>

- 大西克也、大櫛敦弘（2015）『馬王堆出土文獻譯注叢書·戰國縱橫家書』。東京：東寶書店。
- 佐藤武敏監修、工藤元男·早苗良雄·藤田勝久譯注（1993）『戰國縱橫家書』。京都：朋友書店。

* * *

作 者：王 曹傑

Author：WANG Caojie

標 題：從文字使用看《戰國縱橫家書》

Title：An Analysis of “*Zhangguo Zonghengjia Shu*” 『戰國縱橫家書』 from the Perspective of Character Usage

摘 要：關於馬王堆帛書《戰國縱橫家書》的底本來源分批問題，傳統上作三分法，另有作四分法或新三分法。本文從文字使用的角度，通過對同詞異字和同字異形的分布統計分析，提出保守的五分法，並認為第一批仍有可以再分的可能。而寫手的差異對文字使用的一致性影響不大。可以推斷，全書是由經過初步整理的第一批材料和已經基本成書的第二批材料，以及來自其他三批較原始的材料編纂而成的資料集。

關鍵詞：馬王堆帛書 戰國縱橫家書 戰國策 文字 抄本